



人と歴史が紡ぐ図書館



杉村 美紀

上智大学長
総合人間科学部教育学科
教授

Sugimura,
Miki

新年度の始まりにあたり、この「図書館だより」を手にとってくださっている方々のなかには、いろいろな立場の方がおられることと思います。新生の皆さんは、上智大学の図書館はどのようなところかと、いろいろと探険しておられることでしょう。図書館へようこそ。

図書館についての思い出は人それぞれだと思います。私にとって忘れられないのは、今から40年近くも前、大学院生の時に論文の資料を求めて行ったシンガポール国立図書館です。英領マラヤの教育政策について調べていた関係で、植民地時代の1920年代の資料を探する必要がありました。当時は、今のようにインターネットもメールもありませんでしたので、事前に問い合わせはしたものの、実際に行ってみないと資料があるのかもわかりませんでした。シンガポールに到着して毎日、図書館に通い、カウンターでマイクロフィルムに収められた資料を借りて、それを手回しの機械でみていくなかで、ようやく探していたイギリス植民地政府が遺した資料が見つかりました。資料が見つかったことで本当にほっとしましたが、それ以上に嬉しかったのは、一人資料を探している私を見かねてか、図書館の職員の方が本当に親切にしてくださったことです。その方は、ご自身もまた歴史の研究をしておられるということで、以前に、やはり日本から来た先生と資料探しを通じて知り合いになったとおっしゃり、学生の私にも親切にしてくださったのです。日本に帰国後も、手紙でやりとりするようになり、その後再びシンガポールを訪ねる機会があった際にご挨拶に行ったりと御縁が続きました。

その後、シンガポールに行った際に、懐かしい図書館を訪ねようとしたところ、図書館は別の場所に移動し、レンガ造りの建物は近代的な高層ビルに建てかわっていました。一方、

元の図書館があった場所は、今は大きな道が通って公園の一部になっていました。立派になった図書館を拝見して、嬉しいような、少しだけ寂しいような気持ちになりました。今では、当時必死に探したマイクロフィルムに収められた資料も、日本にいながら、検索をかければクリックひとつで目の前のパソコンで取り出すことができます。便利になった一方で、あの時に助けてくれた図書館の方の笑顔も忘れられません。

顧みれば、上智大学の図書館も、1984年に中央図書館として開館する前は、現在2号館があるところに旧図書館がありました。かつての四谷キャンパスをご存知の方は、昔の図書館を懐かしく思っておられる方々もあるかと思いますが。一方で、上智大学100周年記念号の「図書館だよりNo.15」(2013年4月1日発行)によれば、現在の中央図書館棟が1983年に完成した際、竣工式においてケルン大司教区のヨゼフ・ヘフナー枢機卿が、新図書館を「連続性の象徴、普遍性の象徴、現代性の象徴」と表現されたそうです。また1977年に新図書館建設事業計画が発表された際、当時のピタウ学長は、新図書館を「上智大学全体の研究センター、大学の心臓にしたい」と述べられたそうです。現在の図書館が、旧図書館の7~8倍の規模で建設され、その時に図書館と研究所、研究室を一緒にした「研究図書館」として設計されたことは、上智の図書館の先進性をよく示しているように思います。ピタウ先生の時代から半世紀近くが経ち、図書館が紡いできたさまざまな歴史を振り返ると、当時の構想が、多くの方々のお力添えによって実現されてきたことがわかります。

40周年を迎えた今、上智大学の「研究図書館」としての歴史は今年も次の一步へと続きます。図書館の窓のかたちは、本をデザインしたものと聞いています。新生の皆さんはもちろんのこと、図書館を利用されるお一人お一人にとって、まさに本のページを開くように、これからもまた上智大学の図書館を通じて様々な学びや出会いが広がられることをお祈り申し上げます。



教えて!

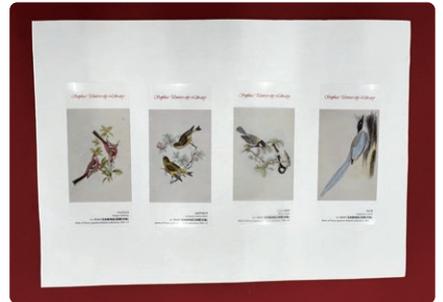
ソフィアンくん



あの鳥の正体は?!

図書館のノベルティグッズ。みんなはいくつ持っているかな? えっ、グッズを知らない!?
図書館では、いろんなグッズを作成しているんだ。
今回はそのデザインに使用されている絵について紹介するよ!

図書館のノベルティグッズ



クリアファイルに、バッグや葉などいろんなグッズがあるんだ。この他に、ブックカバーもあるんだよ。鳥の絵がよく使われているけど、この絵は何か知っているかな?



実はこれ、図書館所蔵の貴重資料の一部で、シーボルトコレクションの中から選んだものなんだ。

シーボルト『日本動物誌【鳥類】初版』 Birds of Fauna japonica: Siebold collections, 1833より



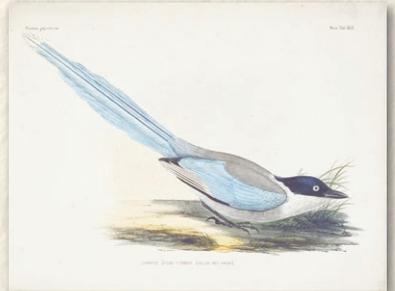
ベニマシコ
Uragus sibiricus



コカワラヒワ
Carduelis sinica minor



シジュウカラ
Parus major



オナガ
Cyanopica cyana

【シーボルトコレクションとは】



江戸時代後期に医師として来日したドイツ人のシーボルトが集めた動植物標本。一説によると、シーボルトは、文学的・民俗学的なコレクションを約5,000点以上、動物標本においては哺乳類一約200点、鳥類一約900点、魚類一約750点など、非常に多くの資料を採集していた模様。これらの標本や資料といった研究成果が「Nippon」や「Fauna japonica」として出版された。



Indiae orientalis insularumque adiacentium typus 1581

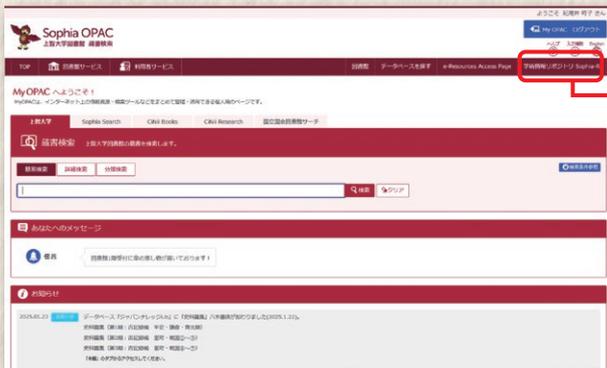


Commentaria in Pentateuchum Mosis / auctore R.P. Cornelio Cornelii a Lapide 1671

シーボルトコレクション以外の貴重資料もあるよ!



普段、貴重資料は貴重資料書庫に保管されていて、特別な事情があって閲覧を希望する場合には、『貴重資料等利用願』をレファレンスカウンターに提出し、図書館の許可を得る必要があるんだ。
でも、『貴重資料データベース』を利用すれば、自宅等の学外からでも気軽に貴重資料を見ることができるよ!



OPAC > 学術情報リポジトリ
Sophia-R > 貴重資料データベース



図書館のノベルティグッズは、図書館ツアーや選書会、スタンプカードなど、図書館のイベントに参加するとゲットできるよ。
いろんなイベントに参加して、グッズを集めてみてね!





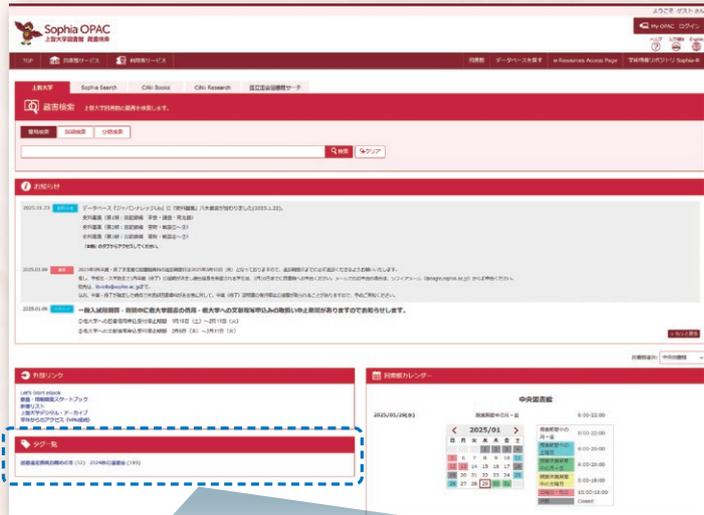
Sophia OPAC

上智大学図書館 蔵書検索

新機能追加のご案内

OPACにタグ機能を追加しました。資料をタグ付けすることで、より便利に資料管理ができます。

タグ機能① 図書館がタグ付けした資料を見る



『タグ一覧』には、図書館だよりに掲載されている「図書選定委員お薦めの本」や毎年秋に実施している「選書会」など、図書館がカテゴリ化したタグ名が表示されます。タグ名をクリックすると、タグ付けした資料の一覧を見ることができます。



図書館ツアー開催!

参加者には記念品も!

以下の日程で図書館ツアーを行います

2025年4月8日(火)～10日(木)

① 10:30～ ② 12:30～ ③ 15:00～
各回30分程度、予約不要



図書館ツアーを開催いたします。参加希望者は開始5分前に1階レファレンスカウンター前に集合して下さい。ツアーに参加すると図書館のことがよくわかるようになります。皆様のご参加をお待ちしております!

ツアー動画も
公開中

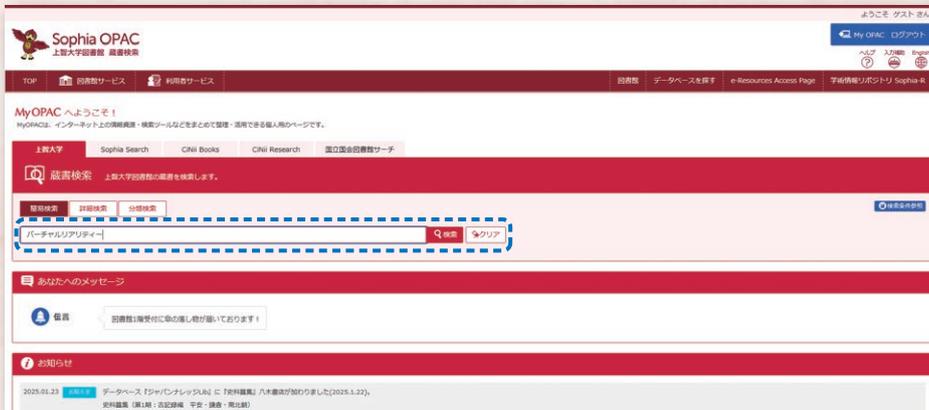
参加できない方や事前に調べておきたい方は
図書館のホームページをチェック!



タグ機能② 気になる資料をタグ付けする

※この機能を使用するには、My OPACへのログインが必要です。

① My OPACログイン後、OPACで検索します。



② 検索結果が表示されたら、気になる資料のタイトルをクリックします。



③ 詳細画面右上に『あなたのタグ』が表示されます。



④ 詳細画面右上の『あなたのタグ』にタグ名が表示されます。



+ タグを追加する をクリックすると、『タグ名称』画面が表示されるので、名前を付けて『登録』ボタンを押します。



⑤ OPAC TOPページ『タグ一覧』の『プライベート』タブから、自分がタグ付けした資料を見ることができます。

※OPAC画面は2025.2月現在のものです。



図書選定委員 お薦めの本



『地下水と地形の科学：水文学入門』

榎根 勇 講談社学術文庫

学部図書 地下2階 452.95 : Ka983



この本は、NHKブックス『地下水の世界』(1992)の学術文庫版として2013年に改めて講談社から出版されたものです。筆者の榎根勇さんはこの時点で御年81歳、水文学・自然地理学・地球科学を専門として主に筑波大学で教鞭を執られました(本文・筆者経歴より)。

日本の地下水をめぐる事情は、著しい技術進歩に加え、思潮の変化や資源をめぐる議論の変遷を反映し、近年大きく変化しました。制度上の動きとしては、「水循環」に地下水を明示的に含めた水循環基本法の制定(2014年・2021年一部改正)や、令和6年能登半島地震時の緊急水源としての役割を考慮に入れた水循環基本計画の変更(2024年)などがあります。この本の改訂自体が10年以上前であり、また筆者なりの意図で加筆修正は最小限に留められたこともあって、副題である「水文学入門」として読むにはある程度の情動的補足が必要であると感じます。

私が考えるこの本の妙味は、自然科学者である筆者が、地下水というユニークな対象を扱う際に必要な、学際的な科学のあり方とそれが伴う課題について悩み考え、その結果得られた知見や仮説を、一般読者を想定して提示している点にあります。

大学で学ばれる皆さんが一度は耳にしたことがあるinterdisciplinary[学際的]なアプローチ(ここではtransdisciplinary[学融合]との違いは問いません)は、挑戦的な試みと評されることがしばしばです。しかし、それはこのアプローチが最近の出自であることを意味しません。専門分野ベースの探求は功罪相まってギリシャ・ローマ時代に遡り、ルネサンス期には基本法則の発見と理論化を通じて啓蒙と理性の時代を牽引しました。実証主義に至る壮大な知の冒険は専門分野の多様化をもたらす一方で、相互補完的作用やそれを

前提としたシステムの理解を難しくしました。私たちは、永年の成果を謳歌しつつも様々な限界に直面し、新たな統合を求める回帰運動が必要になりました。本書は「学際的」という言葉こそ使いませんが、それと共通した問題意識を根底に持っています。

地下水は、表流水とは異なり、湧き出ない限りどこにあるか、どのような動きをするのかを実感することが難しい対象物です。他方、熊本市や霧島市ではそのまま上水として使用され、安曇野ではわさび田で長年農業に使用され、越前大野では天然記念物イトヨの生態を支えてきました。一年中15度前後という地下水の特性は、その量の豊かさと相まって、地域性あふれる日本の歴史と文化の形成に寄与してきました。

著しい地下水位の低下や湧水の枯渇が体感を通じて広く共有されるようになった現在、その原因究明の過程で気候変動に加えて社会の構造的変化(人口分布・産業形態・水使用目的)が関与していることも共通した生活知となりました。人間とのかかわりにおいて保全や管理が必要となった時、上記のような地下水の特徴(目に見えない・人々とのかかわりの深さと多面性)は、より精緻な社会経済上の調整を必要とします。

その際、調整の根拠となる「科学」「科学知」が大きな責任を持つこととなります。筆者は、デカルト的二元論や要素還元主義に敬意を払いつつも、大胆に科学や「知」のあり方を本書の中で語っています。主に黒部川扇状地、武蔵野台地、東京の事例が取り上げられていますが、その背景に知の統合への筆者の強い主張を意識することで、皆さんの読後感がより深く興味深いものになることを願ってやみません。

グローバル教育センター/
グローバル・スタディーズ研究科
国際協力学専攻
教授

杉浦 未希子



叡智が世界をつなぐ



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学図書館だより No.41

発行所 上智大学図書館
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 TEL:03-3238-3510 FAX:03-3238-3139
発行日 2025年4月1日
制作 株式会社スリーライト TEL:03-5640-5430